

後藤朝太郎の庭園観

—オリエンタリズムの射程—

周堂波*

(e-mail : tbzhou_2008@163.com)

<目次>

- | | |
|---------------------|---------------------------|
| 1. はじめに | 4.3. 庭園における「支那趣味」の誕生 |
| 2. 先行研究 | 5. 後藤朝太郎の庭園観：オリエンタリズムの形成 |
| 3. 研究方法 | 5.1. 庭園の中国：オリエンタリズムの形成 |
| 4. 庭園における「支那趣味」の誕生 | 5.2. 後藤朝太郎におけるオリエンタリズムの濫觴 |
| 4.1. 時代風潮としての「支那趣味」 | 6. まとめ |
| 4.2. 「支那趣味」ブームの時代背景 | |

キーワード：後藤朝太郎 (Gotou Asataro)、支那趣味 (China hobby)、オリエンタリズム (Orientalism)、『庭園』 (《The Garden》)、庭園観 (View of the garden)

1.はじめに

大正末期に入ると、支那趣味という新しい概念が登場し、一時ブームとなった。後藤朝太郎はその概念の発起人の一人¹⁾である。本論では、こうした支那趣味ブー

* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期 (中国武漢理工大学准教授)、日本語・日本文化専攻

ムに誘発された中国庭園は、どのように位置づけられるのであろうかということを中心に検討を加える。この点は先行研究においてほとんど触れられてこなかった点である。一方、後藤は近代日本造園史においてもその位置づけがなされていない。日本造園界における専門的組織である庭園協会はこの大正末期（1918年）に創設され、それ以降、1944年まで近代日本造園の発展を見守っていくこととなる。本論ではこの庭園協会との関連から、後藤朝太郎を読み解いて行くこととする。さらに後藤の庭園観の特徴を明確にしていきたい。

2. 先行研究

支那趣味についての先行研究は少ないとは言えない。ただし、そのほとんどは木下杢太郎、谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之介、村松梢風など大正文人の支那趣味に着目しており、特に芥川龍之介と谷崎潤一郎に焦点を当てたものが多い。²⁾

1) 1922年、雑誌『中央公論』の1月号に小杉未醒の「唐土雑観」、佐藤功一の「私の支那趣味観」、伊東忠太の「住宅から見た支那」、後藤朝太郎の「支那文人と文房具」、谷崎潤一郎の「支那趣味と云うこと」との五つの文章が載せられた。「支那趣味」という新しい日本語がメディアに登場したのは、正にこの時であった。「『支那』と『趣味』が結びついて『支那趣味』の一語が生まれたのは、生活の西洋化が進んだ大正時代末期の事だったのである。」と西原大輔はその著書『谷崎潤一郎とオリエンタリズム—大正日本の中国幻想』（2003、中公叢書、p. 24）において論じた。ここでは彼の結論をそのまま引用する。

2) 秦剛（2006）「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象—〈支那趣味〉言説を批判する『支那游記』（近代における「思想」と「文学」）『国語と国文学』83（11）、pp. 57-69；渡邊晴夫（2007）「芥川龍之介の『支那』趣味について」『国学院大学紀要45』、pp. 91-107；渡邊晴夫（2008）「佐藤春夫の「支那」趣味について」『東アジア比較文化研究（7）』、pp. 130-147；木村愛美（2012）「谷崎潤一郎『美食倶楽部』序論：大正時代の〈支那趣味〉を手がかりにして」『文学研究論集（37）』、pp. 119-129などがある。

一方、支那服³⁾、支那劇⁴⁾、支那料理⁵⁾に関する研究も散見される。更に、支那趣味の一環としての南画の流行⁶⁾についての研究や中国の歌⁷⁾に関する研究も見られる。しかし、支那趣味の範疇において、支那庭園の研究は管見の限りではない。

また、近代日本における造園に関する研究も多数ある。ここでは幾つかの例を見てみよう。笠原一人の「1910年代から1940年代前半までの日本における建築と庭園を巡る言説の特徴について」⁸⁾では、主に①「衛生」、「実用」・「行為」・「美」の概念による庭園の意味付、②「庭園と建築が対立」、③「庭園が建築より遅れている」、④「建築と庭園は不可分である」との結論を下している。近田哲也の「日本における住宅庭園の近代化過程に関する研究—庭園改善運動（1919～44）を通して行われた和洋折衷の系譜—」⁹⁾においては、庭園改善運動とは西洋の機能・技

-
- 3) 劉玲芳 (2017) 「1920—30年代における日本の文化人と『支那服』」『比較文化研究NO.125』日本比較文化学会、pp. 141-151などがある。
- 4) 袁英明 (2014) 「京劇・梅蘭芳と日本：三度の訪日公演の背景とその目的」藝文研究 (106)、pp. 100-87；平林宣和 (2014) 「那宅花園における梅蘭芳と大倉喜八郎の邂逅：1919年梅蘭芳帝国劇場公演の起点と『天女散花』」藝文研究 (106)、pp. 86-76。
- 5) 渡辺隆宏 (2008) 「1920年代の『支那料理』 (1) 山田政平の著作から」食生活研究28 (6) 食生活研究会、pp. 21-31；同「1920年代の『支那料理』 (2) 山田政平の著作から」『食生活研究』29 (1) 食生活研究会、pp. 17-27など。
- 6) 稲賀繁美 (2015) 「表現主義と気韻生動：北清事変から大正末年に至る橋本閑雪の軌跡と京都支那学の周辺」『日本研究51』、pp. 97-125；蔡家丘 (2014) 『1910年代-30年代における日本人画家の東アジア旅行と創作についての研究：地域と文化に絡む東アジアの図像』筑波大学 (博士論文) などある。
- 7) 細川周平 (2012) 「戦時下の中国趣味の流行歌」『江南文化と日本：資料・人的交流の再発掘』国際日本文化研究センター、pp. 279-287。
- 8) 笠原一人・古山正雄 (1999) 「1910年代から1940年代前半までの日本における建築と庭園を巡る言説の特徴について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、pp. 471-472。
- 9) 近田哲也 (1999) 「大正昭和戦前期における住宅庭園の近代化に関する研究—庭園改善運動（1919～44）を通して行われた和洋折衷の系譜—」(日本大学大学院修士論文)。

術と日本の伝統的な技術を融合させ、風土・趣味に適した理想的な住環境を模索した運動であったとしている。齋藤英一郎の「近代建築家による日本式庭園研究の系譜とその特徴：著作・雑誌にみる建築界と造園界の交流」¹⁰⁾においては、建築・造園関連雑誌へ庭園に関する論考を投稿した建築家を調査し、また庭園に造詣の深かった建築家(コンドル、大江新太郎、古宇田実、吉田鉄郎、堀口捨己、西澤文隆)の日本式庭園に関する著作・雑誌の論考・作品から、各建築家の庭園研究行動を考察し、建築家の日本式庭園研究の系譜とその特徴を論じた。

上記の三例は、本論の扱う時代、内容や時代背景を考える際に大いに参考になるものである。勿論、近代の日本庭園に関する先行研究は必ずしも上記に留まらないが、多くは建築家あるいは造園家の個人的な庭園観や著作などに注目している。¹¹⁾ただし、以上の先行研究においては、近代の日本庭園の形成・発展過程における中国との関わりについては全く看過されている。¹²⁾実は、後藤朝太郎は、この過程に参加し続けていたのである。以下、後藤朝太郎の言説を中心に、検討を進めていく。

10) 齋藤英一郎 (2006) 「近代建築家による日本式庭園研究の系譜とその特徴：著作・雑誌にみる建築界と造園界の交流」日本庭園学会誌14、pp. 15-22.

11) 例えば市川秀和 (2001) 「大正期における田村剛のモダンデザイン思考と庭園改善運動」『日本造園学会誌』64(5)、pp. 497-500；小野健吉 (1990) 「三溪園に見る原富太郎(三溪)の思想・造園理念・意匠」『造園雑誌』53(5)、pp. 55-60；田中栄治 (2014) 「昭和初期の住宅における建築と庭園：西川友孝『造庭建築』を中心に」『神戸山手大学紀要』(16)、pp. 19-36；小坂橋二三男・進士五十八 (2009) 「小澤圭次郎(醉園)の東京府立園芸学校に於ける造園教育について」『ランドスケープ研究』2(0)、pp. 36-45；田中栄治 (2016) 「庭園研究者・造園家森羅と建築家谷口吉郎：昭和前半期における建築家と造園家の交流」『神戸山手大学紀要』(18)、pp. 59-87；渡邊美保子 (2013) 「山縣有朋の自然観と作庭観」『日本庭園学会誌』(27)、pp. 41-49などがある。

12) 庭園は建築の一部として認められ、明治維新後、洋式建築が流行っており、欧米庭園が中心として扱われたのはその一因であろう。

3. 研究方法

後藤朝太郎は近代の日本庭園に関わる諸組織、諸活動と緊密な関係にあった。と同時に、雑誌『庭園』や専門著書など多数の論説も残している。それら論説の中では、雑誌『庭園』に掲載されたエッセイを含む論説が最も注目すべきところであろう。それらは後藤の個人的な嗜好というのではなく、庭園協会からの任務として、中国庭園に関する情報を発信したものだからである。それは次のいくつかの証言からも窺えよう。

- ①〔上原敬二〕創立の当時塚本博士を訪ねて原稿の速記をしたり、伊東博士から圖を借りて写して原稿にしたり、あとでは後藤さんが塩原で怪我をして掌の三十二枚の骨を折って私が大学病院で原稿の筆記をしたことなど話は尽きない……。¹³⁾
- ②〔後藤朝太郎〕自分もいつも關君の指令で支那の漫談をやる事にしてた。¹⁴⁾
- ③〔龍居松之助〕出版関係のことは嵩山房の小林さんが引受けてくれるというので安心したものの、創刊号の原稿蒐集には随分骨が折れたようであった。それからというものは発起人一同今日から考えると実に真剣で、度々会合しては原稿依頼のことや、会員勧誘のことに頭を悩ました。¹⁵⁾

上記の内容はそれぞれ上原、後藤、龍居の思い出話からのものである。アンダーライン（稿者表記）の箇所から見れば、雑誌『庭園』に載せられるエッセイは明

13) 上原敬二 (1943) 「二十五周年の回顧 (一) (創立の当時)」『庭園』第25巻第1号、p. 33.

14) 後藤朝太郎 (1943) 「二十五周年の回顧 (二) (雑誌庭園の神代の巻)」『庭園』第25巻第2号、p. 23.

15) 龍居松之助 (1943) 「二十五周年の回顧 (一) (二十五年の昔を偲ぶ)」『庭園』第25巻第1号、p. 34.

らかに当時の雑誌側の意図に従って書かれたものであった。例えば、「關君の指令で」とある關君とは、『庭園』創刊の1919年から1934年まで雑誌の編集者であった關倫三郎のことである。稿者の別論¹⁶⁾にも触れたように、後藤はそもそも庭園協会の発起人の一人であるが、表1¹⁷⁾の『庭園』のサブテーマと後藤のエッセイの主題とはほぼ一致しており、文章の内容の調子から判断するに、雑誌編集者などの注文に答える形で書かれたものらしく、内容を雑誌のサブテーマに合わせようとする意識が読み取れる。一方、雑誌『庭園』に発表される後藤の言説は、即時性、時代感、持続時間などから見れば、後藤の他の中国庭園に関する著書などよりオリジナリティがあり、説得力が強いと言えよう。

以上の理由から、後藤が1919年から1944年まで雑誌『庭園』に発表した論説について再度詳細に考察する必要性が出てきた。しかし本論では、1937年7月の日中戦争の勃発を境とし、それ以前の言説を中心に検証していくことを予め断っておく。ここで表1の組立を説明しておこう。番号、『庭園』に収録された論説のテーマ、備忘録（文章の長さや内容によって、原文の要約なのかその一部の抜粋なのか）、雑誌の号数、雑誌の主題（雑誌『庭園』は26年の歴史において、時代の雰囲気を感じに捉え、四度も¹⁸⁾改題している。特に注目されるのは表1のように、例えば、1926年1月号まで、「水の庭園号」、「材料号」、「名勝地号」、「甲州号」、「海外造園号」、「東洋庭園号」、「涼味号」、「希望号」など主テーマの下に、

16) 周堂波 (2019) 「庭園協会及び東京高等造園学校の設立に関わった後藤朝太郎」『比較文化研究』No. 134、日本比較文化学会、pp. 111-123.

17) 後藤朝太郎が1919年から1944年まで雑誌『庭園』に発表した論説は稿者の統計によると、全部で75ある。本論ではその一部だけを示す。

18) 一回目は1927年1月号から『庭園』を『庭園と風景』に、二回目は1936年1月号から『庭園と風景』を『庭園』に戻し、三回目は1939年9月号から『庭園』を『庭園と風光』に、更に四回目は1942年1月号から『庭園と風光』を『庭園』に戻している。

サブテーマも付けられている点である。19))、対応する雑誌の出版年月、頁数などから構成する。ここで表1を参照し、それに合わせながら分析していく。

〈表1〉 稿者が雑誌『庭園』の各号を確認してから作成したものである						
番号	『庭園』に収録論説	備忘録	号数	雑誌主題	出版年月	頁数
1	支那庭園の特徴(支那庭園の特色について)	融通が効き、よほど自由であり、どこまでも形式上に趣向を凝らし、すこしでも意匠の凝らされる処はどこまでも凝らすというようにして纏まりをつける。	第1号	×	1919年7月	pp. 21-24
2	極南の楽園台湾島の風景利用	風景利用の要諦は1、交通機関の自由; 2、気候の良好; 3、天為の長所。	第2号	×	1919年12月	pp. 32-34
3	趣味の表はれる庭園	濃厚趣味は東洋の庭園特色を考える上で最も興味ある問題で、他山の石として支那庭園を研究する。	第2巻第3号	×	1920年5月	pp. 13-14
4	風致のより観たる水	上野不忍池は弁天と伊東博士設計の美門の他、見るべきものなし。	第2巻第6号	水の庭園号	1920年8月	pp. 6-8
5	支那の庭園 (その一)	支那の自然景色から庭園との関係を述べる。	第3巻第4号	材料号	1921年4月	pp. 8-9
6	支那杭州西湖の観光	杭州西湖は萬寿山の昆明湖、水戸の借楽園千波沼の原型であり、東洋の最も風致に富み、最も有名な名勝地である。箱根軽井沢よりも夏旅行に最も適当な場所である。	第3巻第7号	名勝地号	1921年7月	pp. 8-9
7	昇仙峡の宣伝と耶馬溪及び泰山	昇仙峡は耶馬溪と甲乙を定められないが、東京と富士山に近いので有利である。支那の泰山に似るが、宣伝は泰山に学ぶべきである。	第3巻第8号	甲州号	1921年8月	pp. 27-29
8	北京の中央公園に現はれた支那の國民性	衆人の前にそれを見せてその裏は手を切っているのを示すと考える。	第4巻第3号	海外造園号	1922年3月	pp. 6-9
9	支那の庭園 (その二)	支那の大自然に対する庭園の位置を述べる。支那の自然風光 (洞庭秋月など瀟湘八景) が広義の支那庭園、また狭義の支那庭園の出発点ともなる	第5巻第2号	東洋庭園号	1923年2月	pp. 2-5
10	支那名園視察の慇懃	支那名園の観光や自然の風光観察でもやり、廬山、泰山、蘇州滄浪亭、留園、揚州、何家花園、西湖などがいい。	第5巻第8号	×	1923年8月	pp. 4-5
11	支那園亭の対聯趣味	庭園と対聯とは最も密接な関係があり、聯がなくてはいけない。聯ない庭園は支那庭園の意義がなくなる。	第6巻第3号	×	1924年3月	pp. 8-10
12	雲仙の将来	最近軽井澤、箱根、叡山諸地方における西人の避暑客数が減りつつある……。	第6巻第8号	×	1924年8月	pp. 8-10
14	支那名流の庭園観	千古支那庭園は半ばルインで、廢墟の如き姿であるが、そこ詩的情趣が浮び出て実に何とも言えぬ哀れな渋みがついてくる。自分はそこを愛するのである。	第8巻第1号	希望号	1926年1月	pp. 16-20
16	東洋一の民族公園たるべき四川三峽の大自然美	欧米の大自然を観察に出かけるのと同じ筆法で支那の大自然天然の造化の妙を探すのも他山の石となる。三峽は支那民族全体の大自然と言ってもいいが、又日本をも入れる大東洋の民族的大公園と言ってもいい。	第8巻第12号	支那趣味号	1926年12月	pp. 16-18 p. 30
49	廬山を語る	東洋の天地でこの廬山くらい文化設備の完備する避暑地はあるまい。	第21巻第4号	同上	1939年4月	pp. 32-37

19) 稿者の統計によると、1919年創刊号から1920年4月号まではサブテーマはないが、1920年5月号の別荘号から停刊時までにはサブテーマが付けられていないのは、ほとんどない。

4. 庭園における「支那趣味」の誕生

4.1. 時代風潮としての「支那趣味」

表1-9と表1-16を見てみよう。それぞれ「東洋趣味号」と「支那趣味号」というサブテーマ（雑誌主題『庭園』）が付けられている。ここで注目すべきはなぜ先に「東洋趣味号」とし、後から「支那趣味号」としたのかという点である。エドワード・サイード著『オリエンタリズム』の訳者である今沢紀子が、「訳者あとがき」において述べている文が些かヒントを提供してくれている。

主体＝観る側としての西洋と客体＝観られる側としての非西洋世界とが対立するオリエンタリズムの構図に対して、近代日本はきわめて特異な関わり方をしている。西洋から観て地理的・文化的に非西洋世界である限りにおいて、言うまでもなく日本は客体＝観られる側である。しかし、近代日本は帝国主義列強の一員となる道を選び、植民地経営を視野において、西洋思想を積極的に学び取ろうとしてきた。（中略）日本は西洋の東洋観をも摂取して、オリエンタリズムの主体＝観る側に立ったのである。²⁰⁾

これは、日本が西洋の東洋観を取り入れて消化した後、オリエンタリズムの主体として、東アジアにおける後進国を見ていたということになる。こうした道筋で考えれば、近代日本庭園の発展過程においても、日本は同じ立場に立って、中国庭園に対応した可能性が高い。上文で触れた西原大輔の『谷崎潤一郎とオリエンタリズム—大正日本の中国幻想』では次のように結論を結んでいる。

20) エドワード・W・サイード著・今沢紀子訳（1993）「訳者あとがき」『オリエンタリズム（下）』平凡社、pp. 393-394.

実際、西洋対オリエントの関係を、日本対アジアに応用してゆくという構造は、文学に限らず、ありとあらゆる近代日本の芸術・文化に見られた現象であった。学問の分野でも、ヨーロッパ人のオリエント研究をモデルとして、日本人がアジア研究を行おうという発想があった。中国をはじめとしたアジア諸地域をオリエントとして扱う動きは、この時代の風潮だったのである。²¹⁾

このように、中国をはじめとしたアジア諸地域をオリエントとして扱う動きは、大正時代前後の風潮であった。それでは、なぜ大正時代に支那趣味の風潮が巻き起こったのであろうか。

4. 2. 「支那趣味」ブームの時代背景

時代を少し遡って見てみると、欧米では1841年にトーマス・クック（1808-92）がイギリス国内の団体旅行を主催して以降、全世界における交通設備が敷かれるのと相まって、グローバル観光旅行が急速に発展し、軌道に乗り出す。謎が溢れるエジプトのピラミッドの探察、宗教崇拝の聖地エルサレム詣で、更に地球を一周する世界漫遊の提唱など、観光に関する産業が盛んになっていった。こうした流行にともない、日本でも幕末から明治時代にかけて、中国も含めた世界へと旅を続けた人は少数とは言えない。その大部分は主に軍人、ジャーナリスト、画家、留学生、政府の役人、大手会社の社員などに留まっていた。大規模な人員往来は大正時代を待たなければならない。それは大正時代に入ると、中国や日本における鉄道交通網の整備がなされた点と関係してくる。中国では1911年に京奉（北京から瀋陽まで）鉄道が竣工された。同年には天津と浦口（南京）を結ぶ津浦鉄道

21) 西原大輔（2003）『谷崎潤一郎とオリエンタリズム—大正日本の中国幻想』中公叢書、pp. 139-140.

が敷かれ、揚子江対岸の南京から上海までの鉄道と合わせ、北京から上海までの路線が繋がった。更に1906年に敷設された京漢鉄道や、揚子江を航行する日本の定期船などが交互に織り交じることにより、中国の主要都市が近代的交通機関で結ばれ、中国一周旅行の実現が可能となった。²²⁾ 大体同じ時期、日本は1911年に朝鮮の新義州とその向こう側の安東（遼寧省丹東市の旧称）とを繋げる鴨緑江大橋を完成させ、朝鮮と満州（中国東北）をつなぐ直通列車が初めて運行した。これに歩調を合わせ、1912年には新橋から下関までの特別急行列車の運行が始まり、下関から釜山までの連絡航路を介し、朝鮮の鉄道に連続し、満州に直達できるようになった。一方、日本の旅行社も盛んに旅行の手配を行う。1912年に外国人旅行客を誘致斡旋するため、ジャパン・ツーリスト・ビューローが組織された。しばらくの後、日本人旅行客もサービス対象に入れ、「日支周遊券」、「日満連絡券」、「日満巡遊券」などの発売を開始している。²³⁾

4. 3. 庭園における「支那趣味」の誕生

このような風潮において、中国庭園はどう見られたのであろうか。支那趣味という言葉が初めて正式に使われ始めるのは1922年1号の『中央公論』からのことであると上記の西原書は指摘している。そうであれば、庭園における支那趣味はいつから始まったのか。後藤は『中央公論』において「支那文人と文房具」を発表した2年後の1924年、大阪屋号書店より『支那趣味の話』を出版している。その中の「支那建築の意匠」において、

22) 劉建輝（2000）『魔都上海—日本知識人の「近代」体験』講談社、pp. 181-189.

23) 日本交通公社（1982）『日本交通公社七十年史』日本交通公社社史編纂室、p. 33.

近来支那趣味が大分日本に宣伝され知識階級にして支那の家具支那の料理支那の旅行に興味を持たた方の増して来たことは頗る快心のことである。²⁴⁾

と述べている。後藤の言説から見れば、支那趣味が少なくとも1924年以前からすでに流行り始めていたことになる。また日本全国津々浦々にまで広がるということではなく、「知識階級」を中心とした一定の範囲の流行であり、支那の家具等に誘発されたものなのである。同様の話でやや詳細に記しているものを表1-10「支那名園視察の慇懃」より見てみよう。

近来支那趣味の風流人士の間に入ってくるにつれて家具調度の類から織物、表装ものに至る、多方面のものにその色彩がよく認められるようになった。家の建築を支那式にやりたいという人にもチョイチョイ見えるようになった。家と言っても住まい全部でなく応接間とか庭の方に出た建築物又は亭榭楼廊の類について出来るなら支那気分を漂わせたいと言った気持ちになってきたのである。昔徳川時代に時折あった支那趣味の庭園が明治時代に亡くなりかけた。支那を模して庭でも作りたいという気の人があまりいなかった。それが最近になって復活してきたような感じがする。これは当然の帰結であって、一方に西洋建築や西洋の庭の写しができる。これもよろしいのであるが、また一方に東洋風の庭が考えられるとは尤も至極なことである。²⁵⁾

「風流人士の間」との言い回しが「知識階級」へと代わっているが、「家具調度の類から」は後藤自身の1924年の言説と一致する。これはウィリアム・チェンバー

24) 後藤朝太郎 (1924) 『支那趣味の話』大阪屋号書店、p. 278.

25) 後藤朝太郎 (1923) 「支那名園視察の慇懃」『庭園』第5巻第8号、p. 4.

ズの『中国の建物、家具、服装、器具及び日用品の意匠』 [Designs of Chinese Buildings, Furniture, Dresses, Machines and Utensils(1757)] に似ている。それとどのぐらい関連があるのかについては、今後の課題であるが、少なくとも支那庭園の趣味が現れたのは支那の家具から誘発されたためだと言ってよかろう。最も注目されるのは後ろの「昔徳川時代に時折あった支那趣味の庭園が明治時代に亡くなりかけた。支那を模して庭でも作りたいという気の人があまりいなかった。それが最近になって復活してきたような感じがする。これは当然の帰結であって、一方に西洋建築や西洋の庭の写しができる。これもよろしいのであるが、また一方に東洋風の庭が考えられるとは尤も至極なことである」という部分である。後藤は江戸時代の支那趣味と現在の支那趣味との違いをあまり意識していないようであるが、「最近になって復活してきたような感じがする」としている点から見ると、明らかに前近代との断続があったのではないかということになる。また「これは当然の帰結であって、一方に西洋建築や西洋の庭の写しができる。これもよろしいのであるが、また一方に東洋風の庭が考えられるとは尤も至極なことである」と述べている点でも、西洋を強く意識している。なぜこの時、支那趣味が復活してきたのか。次の話を見ておこう。

十年程前に逝った私の極めて近しい関係の老人にたいへん支那趣味の人があった。安井息軒門下の立派な漢学者で、長く司法官を務めた人だった。明治十四五年頃、任に長崎に在った事があるから、恐らくは其の頃から此趣味を持つようになったものだろう。邸内に支那室と云うものを造り、其処に支那の器物書物などを集めて楽しんで居たものだ。(中略) ロココ時代のヨーロッパ貴族のように、室内を中国の文物で飾ってご満悦のこの老人は、身のまわりを徹底して中国風にした。老人の「支那室」は、遠くから見ると「南画などに見る亭のよう

な形」をしていたという。庭先には「支那甕」や「榻」が並べられた。部屋の中央には「紫檀の卓子」や「紫檀製の椅子」がすえられ、隅には「臥榻」や「曲桌」が配されている。天井からは「南京玉で飾られた六角の吊燈籠」がぶらさがる。柱には「聯」が掛けられ、壁にはエスニック風の「種々の楽器」が吊り下げられている。さらにこの一室には、「卍崩しの組子の硝子窓」から光が注ぐ仕組みになっていた。チャイナ風の建築や装飾を楽しんでいたこの老人こそ、エキゾティシズムとしての「支那趣味」の先駆けであろう。²⁶⁾

上記は日比谷公会堂や早稲田大学大隈講堂の建築家で工学博士の佐藤功一（1878-1941）が後藤と同時に、1922年1月号の『中央公論』に発表した言論である。ここでは明治十四五年頃、建築などにおけるエキゾティシズムが生まれたと結ばれている。この結論にはあまり賛同できないが、明確に証明できるのは佐藤が1922年の時代感を明治十四五年頃のことに投射したためであろう。つまり、1922年前後、日本の庭園界において、支那庭園の趣味はエキゾティシズムとして扱われていたのである。日本庭園界の他の人物たちはどのように考えていたのであろうか。上文の『庭園』編集者である關倫三郎の話を見てみよう。

（前略）その本多（本多静六：稿者注）博士も上原氏（上原敬二：稿者注）と殆ど入替に同十一年早々幹部の本郷高德、中島三郎（旧姓高橋）両氏と共に洋行、同年末に帰朝された。また有力な幹部として協会の手を引いてきてくれた田村剛氏が同十二年（1923年：稿者注）春から翌年夏まで外遊されるというように、幹部が相次いで欧米造園界の視察に出かけられた。²⁷⁾

26) 佐藤功一（1922）「私の支那趣味観」『中央公論』1月号（新春号）、pp. 193-204.

27) 關倫三郎（1943）「庭園協会の幼少年時代」『庭園』第25巻2号、p. 25.

上記の引用文は、1919年から1934年まで、雑誌『庭園』を見守っていた編集者の關が庭園協会成立25周年の思い出話として記した一部である。全文において支那庭園に触れられた箇所は一つもない。後藤が中国庭園に関する論説を多数発表していたが取り上げられてもいない。それはなぜであろう。編集者の立場、強いて言えば、庭園協会の視野から見れば、中国庭園はあまり重視される対象ではなかった。欧米風潮という渦巻き・大潮流の中にあつては、中国庭園は触れられることはあつても、たかだか将棋の駒のような小さな存在であつたと稿者は推量している。より端的に言えば、当時の中国庭園は欧米システムの評価基準の軸に置かれた認識対象として扱われていたためであろう。後藤はこのような時代的背景に包まれ、意識しようがしまいが、多少なりとも個人の意思に左右されない状況にその身が置かれていたのである。後藤はどのように影響を受けたのであろうか。

5. 後藤朝太郎の庭園観：オリエンタリズムの形成

5.1. 庭園の中国：オリエンタリズムの形成

上記の西原大輔は後藤朝太郎にも言及している。しかし、彼は後藤の支那趣味が伊東忠太の支那趣味と同類で、「中国人の趣味」と結んでいる。それに対し、谷崎潤一郎と佐藤功一の趣味を「西洋かぶれした洋風の趣味に対して、旧来の漢詩、書道、骨董等が『支那趣味』として意識されていた。『支那趣味』を日本人の漢学の素養、文人的教養という意味で使ったのである」と定義し、一線を画した。²⁸⁾

28) 西原大輔 (2003) 『谷崎潤一郎とオリエンタリズム—大正日本の中国幻想』中公叢書、pp. 28-29.

ろうか。表1-49番を見てみよう。

日本ではこれまで漢学者によって廬山という山の名が言い伝えられているので、成る程そうかと想像をたくましくして詩的に解釈している傾があるのである。ところが、西洋人の方は実際的である。英人リットル翁が古くから宣教師としてそれに登り困難に打ち開拓をしてきた。それから段々と立派な外人の避暑地に仕上げられてきた。今日では恐らく東洋の天地で、この廬山くらい文化設備の完備している避暑地はあるまいと言われている。(中略)英人は素より、米人であっても、仏国であっても、またロシア人であっても、そうした連中が非常な大規模な別荘地をそれぞれ楽しんで拵えてに至った。²⁹⁾

後藤の話から見れば、新時代の日本人が廬山を見る立場は明らかに今までの漢学者とは異なっている。彼は西洋人の視点を強く意識している。特に「そうした連中」の「連中」という言葉は帝国主義列強の一員となるやり方を選び、植民地経営を視野において、西洋思想を積極的に学び取ろうとしてきた日本版オリエンタリズムを露骨に表したものであろう。そもそも東洋という言葉の字源は明らかではないが、オリエンタリズムから日本人に翻訳された可能性があるのではないかと稿者は推量している。エドワード・W・サイードはその著書『オリエンタリズム』において、「オリエンタリズムとは、むしろヨーロッパ人の頭のなかで作られ、珍らしい体験談などの舞台であった。」³⁰⁾と定義する。後藤の上記の話はこの定義に当

29) 後藤朝太郎 (1939) 「廬山を語る (一)」『庭園』第21巻第4号、p. 33.

30) 「エドワード・W・サイード著・今沢紀子訳 (1993) 「訳者あとがき」『オリエンタリズム (上)』平凡社、p. 17.

てはまるであろう。さて、引き続き表1-16番の「支那趣味号」を見てみよう。

<h1 style="margin: 0;">庭園</h1> <h2 style="margin: 0;">支那趣味号</h2> <p style="margin: 0;">第八卷第十二号 通卷第八十号</p> <h3 style="margin: 0;">目次</h3>	
<p>口 絵</p> <p>支那北京、香山……………寫 眞 版</p> <p>同 蘇州留園……………寫 眞 版</p> <p>朝鮮慶州の古蹟……………寫 眞 版</p> <p>臺灣臺北植物園……………寫 眞 版</p>	<p>■西湖(書)</p> <p>□支那庭園と様式……………原 暎(一)</p> <p>□江戸時代の庭園に現はれたる支那趣味……………龍居松之助(一)</p> <p>□支那庭園史の瞥見……………那 波 利 貞(一)</p> <p>□上海附近の庭園……………山 本 寅 雄(一)</p> <p>□支那庭園の石組法……………田 村 剛(一)</p> <p>□東洋一の民族公園たるべき四川三峡の大自然美……………後藤朝太郎(一)</p> <p>□朝鮮慶州宮苑の址……………池 邊 武 人(一)</p> <p>□近代庭園講話(第六講、丁)……………林 學 博 士 田 村 剛(一)</p> <p>□現存名園の原形調査を提唱す……………鬼 斗 生(一)</p> <p>□北九州に於る庭木の中心地 古賀村の話……………永 見 健 一(一)</p> <p>□ヤマイヌとオホカミ……………緑 衣 山 人(一)</p> <p>□相州二宮に於る別荘園一瞥記……………滴 水 生(一)</p> <p>■沼津市千本松原問題講演會の記……………景 園 生(一)</p> <p>□協會記事、造園界消息……………編 輯 便 り(一)</p>

図2. 『庭園』1926年12月号「支那趣味号」の目次

目次から見れば、口絵は中国、朝鮮、台湾（その時は日本の植民地：稿者注）であり、本文も大体同じである。つまり、当時の中国は植民地であった朝鮮、台湾と同じ地位として日本庭園界に扱われていたのである。後藤はこの号に「東洋一の民族公園たるべき四川三峡の大自然美」を発表した。

(前略) 今日国立公園問題で此の狭い日本の島国のうちで色々と踏査せられるのも結構なことであるが、然し時には欧米の大自然を視察に出かけるのと同じ筆法で以て、支那四百余州の大自然美天然の造化の妙を探って見るのも他山の石となるどころの話でない。31)

31) 後藤朝太郎 (1926) 「東洋一の民族公園たるべき四川三峡の大自然美」『庭園』第8卷第12

上文における「欧米の大自然を視察に出かけるのと同じ筆法で以て」というところは、日本は西洋の大自然への扱い方を摂取し、オリエンタリズムの主体＝観る側に立った明確な証拠であろう。そもそも国立公園という概念も欧米から発源したものである。表1の後藤の言説を総覧してみると、中国庭園に注目しながら自然風景にも関心を持っていることがわかる。また、上文の分析において考察されたように、後藤の言説は上原や編集者の關に同調して書かれたものであることによると、後藤のオリエンタリズムはただ彼自身の立場に限らず、日本庭園界のある種の投射であろうと稿者は考えている。さて、「支那趣味号」においては、西湖が挿絵として重視されたようである。後藤は西湖についてどう考えていたのだろうか。表1-6番を見てみよう。

(前略) とにかく西湖は東洋の最も風致に富み最も有名なる名勝地に数えられている所であるから、夏季の旅行などには最も適当な場所である。吾人は箱根軽井沢に二週間も費やす紳士淑女に、時には是非夏の休みを、僅かな余日で足りるわけであるから、西湖行きの壮挙を勧めたいのである。³²⁾

後藤は西湖を東洋の最も風致に富み最も有名な名勝地として高く評価した。その基準は何か。日本の名勝地である箱根や軽井沢にも触れられているが、それらは西湖とどのような繋がりがあるのであろうか。続いて表1-12番を見てみよう。

軽井沢、箱根、叡山諸地方における西人の避暑客が最近続々その別荘を引揚げ、欧米遊覧客のその地に来遊する者漸くその数を減ぜんとする。次には雲仙、対岸との比較研究である。(中略) その他銭塘江畔、西湖湖畔の状態など何れも

号、p. 16.

32) 後藤朝太郎(1921)「支那杭州西湖の観光」『庭園』第3巻第7号、p. 9.

大陸的にして頗る西人の先駆者が苦心して今日の盛況を示している所である。33)

このように西洋人は、日本の従来の名勝地と認められていた軽井沢、箱根などを離れ、中国の西湖などに引っ越していったのである。西湖は西洋人から東洋の第一のものとして認識された。後藤はあくまでもその西洋の東洋観を借り、自分の立場として日本庭園界に発信していたのである。後藤は表1-14番において中国名流の庭園観を述べる際に、興味深い言葉を発している。

どこの庭でも年代が経たなくては価値がないものであるが、支那の庭は特にその感じがある。幸に支那名流の後は大抵庭の手入れをしない。風雨に崩れたら崩れたきりでおいておく。それ故に古色のつく点は支那庭に限る。千古支那庭園は半ばルインで、廢墟の如き姿である。34)

中国庭園は半ばルインで廢墟のような姿とある。半ばルインとは廢墟の意味であろうが、なぜここで廢墟という漢字のみを使わないのか。後藤の審美観あるいは彼の考え方自体が明らかに欧米舶来の概念を意識していたからであろう。すなわち後藤は、確かに欧米の知識システムより多大な影響を受けていたという点である。この廢墟イメージについて、後世の見解であるが、西尾朗の「英国における中国の映像-3-Sir William Chambersと彼の英華式庭園」より見てみよう。

ローマの廢墟を思わせる建物はじめ、mosque風の建物もあれば、Gothic風のchapelもあり、Balbeckの建物をモデルにした“The Temple of Sun”と呼ばれるものもあれば、中国の孔子廟を真似た“House of Confucius”と呼ばれるものが

33) 後藤朝太郎 (1924) 「雲仙の将来」『庭園』第6巻第8号、pp. 8-9.

34) 後藤朝太郎 (1926) 「支那名流の庭園観」『庭園』第8巻第1号、pp. 17-18.

あり、その上、古典的風格を備えた西洋風のOrangeryもあるといったように、各種各様の形式からなる建物を並置することにより、それぞれの“scene”の効果をはかった模様である。³⁵⁾

上記の引用文は西尾が1972年に発表したものより一部抜粋したものである。ここで西尾は廢墟の効能について述べていないが、後藤からすれば、当時の日本にとって中国の廢れた所は、恰も18世紀のイギリスにとっての古代ローマの廢墟のような存在であろう。後藤が中国庭園を考察する際、頭の中で欧米人を意識し、欧米人の世界観を取り入れて消化し、西洋が世界を見る視点、やり方、判断基準に従い、中国庭園に注目し、それから日本の庭園界と分かち合う姿が浮かび上がる。つまり、近代日本庭園界におけるオリエンタリズムの形成である。

5.2. 後藤朝太郎におけるオリエンタリズムの濫觴

上節において、後藤が半ばルーンという概念をなぜ使ったのかについて、その由縁は不明であると稿者は指摘したが、再度後藤の成長過程を辿ってみる必要がある。後藤朝太郎に関する先行研究がほとんど彼の大学時代から出発しているのは、1923年の関東大地震と二次世界大戦などにより、彼の蔵書や収蔵品などの資料が残らなかったからである。後藤の幼少年時代からの成長過程は彼の著書の跋などから断片的な情報しか得られないが、愛媛県立図書館えひめ資料室と熊本大学五高記念館から入手できた資料を以下に整理し纏めてみる。

愛媛県立図書館えひめ資料室より以下の四つの資料を取り寄せた。

- (1) 愛媛県立松山中学校同窓会（昭和11年）『愛媛県立松山中学校同窓会名簿』第4号、p. 55「明治33年第8期卒業80名の中に、文学士として記載がある。」

³⁵⁾ 西尾朗（1972）「英国における中国の映像-3-Sir William Chambersと彼の英華式庭園」『関西学院大学社会学部紀要』（25）、p. 25.

(2) 『保恵会雑誌』72、74、79の各号に後藤朝太郎の文章がある。

① 後藤浅太郎（明治33年11月）「筆のすさみ」『保恵会雑誌』72号、pp. 71-73。

② 後藤朝太郎（明治34年4月）「娑婆の謬見」『保恵会雑誌』74号、pp. 46-52。

③ 後藤朝太郎（明治36年1月）「明治の文学者の特質」『保恵会雑誌』79号、pp. 16-19。

(3) 後藤朝太郎（1939）伊予史談会「郷土伊予の思ひ出」『伊予史談』100号、pp. 56-59「学校時代の先生では渡部、村井の両先生は今はいられず」や「寄稿を申越された旧友曾我君は小川勇、桜井忠温、大島義修、片上伸、武田豊四郎の諸君始めあの頃の友人中の友人」等の記載があり、これらの人々は松山中学時代の恩師、旧友と思われる。

(4) 愛媛県生涯学習センター（1989）「えひめの記憶」『愛媛県史（人物編）』

これにより、1900年11月から1901年4月までの間に、本名の後藤浅太郎をその後の後藤朝太郎へと改名していたことに気づかれたが、改名理由は不明である。

また、熊本大学五高記念館からは後藤の第一次入学志願書と第二次志願書³⁶⁾を取り寄せた。

第一次入学志願書（右側は現代日本語の直し付き：稿者訳）

36) 第一次入学願書は8枚、第二次入学願書は4枚ある。ここでは、その一部だけを引用する。

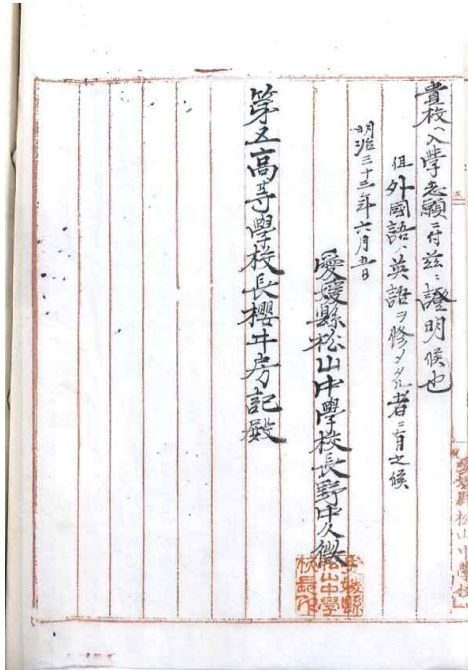


図3.

貴校入学志願に付茲に証明候也

且外国語は英語を修めたる者に有之候

明治三十三年六月五日

愛媛県松山中学校校長野中久徵（印鑑）

第五高等学校校長櫻井房記殿

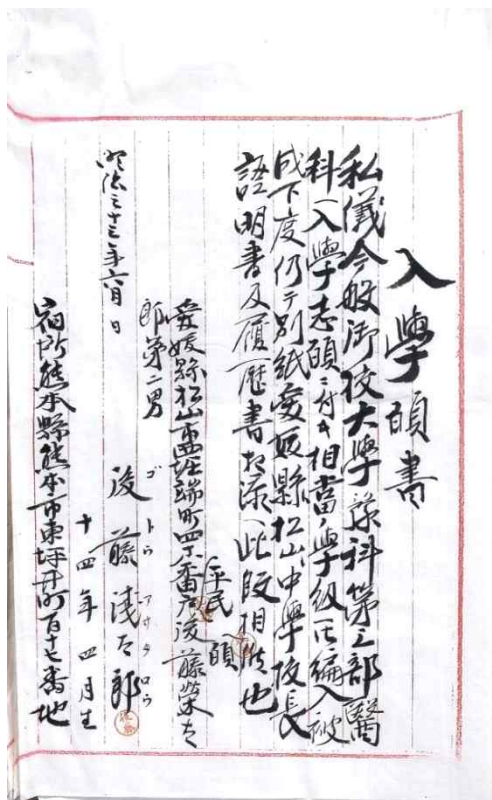


図4.

入学願書	
私儀今般御校大学予科第三部医	
科入学志願に付相当の学級御編入被	
成下度仍て別紙愛媛県松山中学校長	
証明書及履歴書於添（此段相願候也）	
愛媛県松山市西堀端町四十八番	
戸平民後藤栄太郎第二男	
明治三十三年六月	日
後藤浅太郎	
十四年四月生	
宿所熊本縣熊本市東坪井町百七十番地	

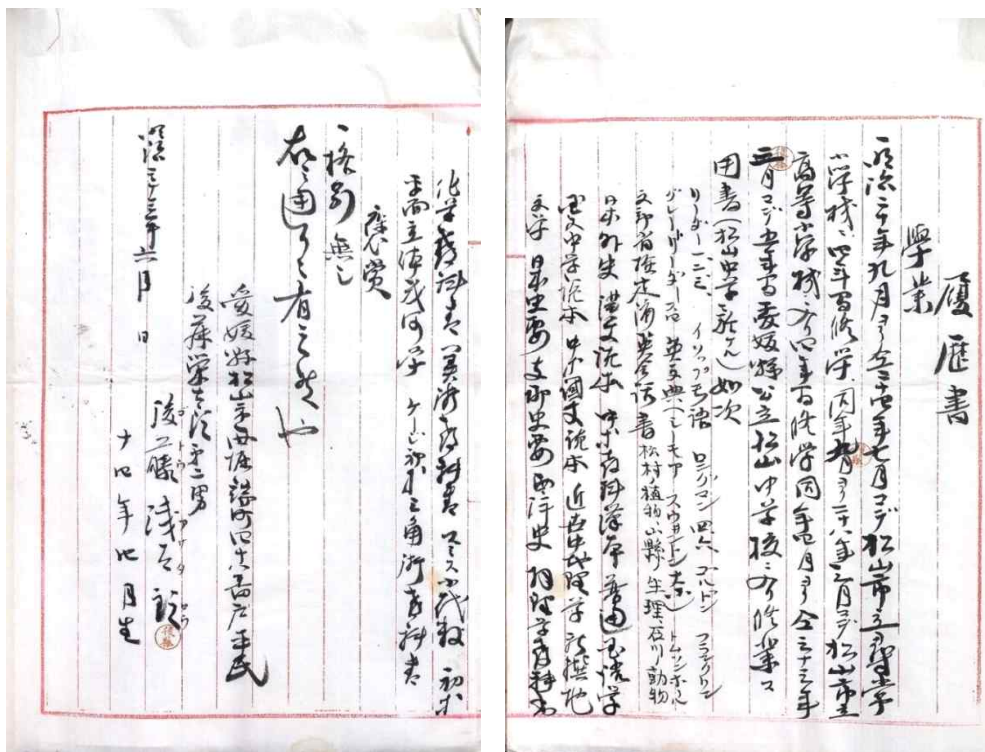


図5.

履歴書	学業	<p>明治二十年九月より同二十四年七月まで松山市立尋常 小学校で四年間修学、同年九月より二十八年三月まで松山市立 高等小学校に入り、四年間修学、同年四月より同三十三年 三月まで五年間愛媛県公立松山中学校に入り修業す 用書（松山中学における）如次</p>	<p>リーダー、二、三 イソビブ物語 ロングマン四、六、ゴル ヴト シ フランクリン グレートリーダーズ四、英文典（シーモアスウメントン大小）、トム ソンホール、</p>	<p>文部省検定済英会話書 松村の植物、山果の生理、石川の動物、 国文学読本、中等国文学読本、近世中地理学、新選地</p>	<p>文学、日本史要、支那史要、西洋史、物理学教科書、</p>	<p>化学教科書、美術教科書、スミス小代数、初等</p>	<p>平面立体幾何学、ケージ初等三角術教科書</p>	<p>褒賞</p>	<p>格別無し 右之通りに有之然也</p>	<p>愛媛県松山市西堀端町四十八番戸平民 後藤栄太郎第二男 後藤栄太郎 明治三十三年六月 日 後藤浅太郎 十四年四月生</p>
-----	----	--	--	--	---------------------------------	------------------------------	----------------------------	-----------	--	---

第二次入学志願書（現代語の直し付き：稿者訳）

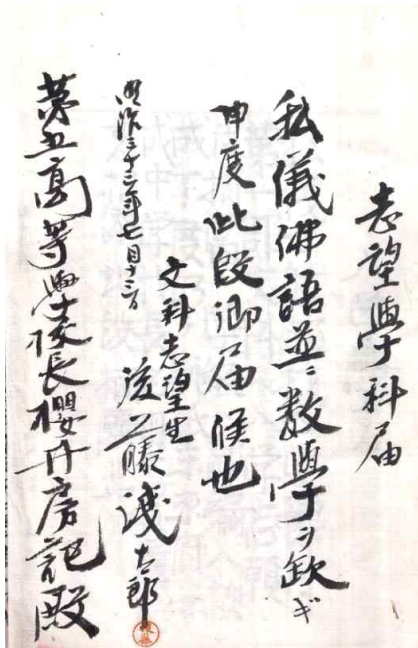


図6.

志望学科届
私儀フランス語並びに数学を欠き
申度此段御届候也
文科志望生
明治三十三年七月十三日 後藤浅太郎
第五高等学校長櫻井房記 殿

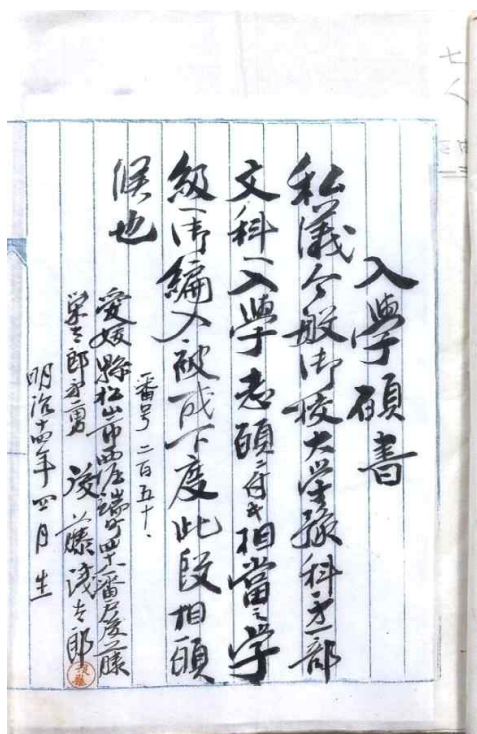


図7.

入学願書
私儀今般御校大学予科第一部
文科（入学志願に付き相当の学
級御編入被成下度此段相願
候也
番号 二百五十
愛媛県松山市西堀端町四十八番戸後藤
栄太郎第二男
後藤浅太郎
明治十四年四月 生

上記の熊本大学五高記念館より得られた資料から、次のように言えるであろう。

①後藤は五高に入学する前、二回の志願書を出している。初めは大学予科医科に入ろうとしたが、何らかの理由で実現できなかった。恐らく試験に合格できなかった可能性が高い。

②後藤の履歴が明らかになった。

明治14年（1881年）4月愛媛県に生まれ。

明治20年（1887年）9月から同24年（1891年）7月まで松山市立尋常小学校。

明治24年（1891年）9月から同28年（1895年）3月まで松山市立高等小学校。

明治28年（1895年）4月から同33年（1900年）3月まで愛媛県公立松山中学校。

明治33年（1900年）9月から同36年（1903年）7月まで第五高等中学校。

明治36年（1903年）9月から同40年（1907年）7月まで東京帝国大学³⁷⁾。

明治40年（1907年）9月から同45年（1912年）7月まで東京帝国大学大学院³⁸⁾。

後藤は第五高等中学校に入ってから、フランス語と算数を選ばず、体系的に英語を勉強し始めたようである。それは上記の図3. 「且外国語は英語を修めたる者に有之候」から分かる。また「中学を卒へ熊本の高等学校時代には語学として英語の分解的穿鑿に自ら狂人の如く耽り、大学に入りては、（中略）とりつけ上田先生の言語学を聴講し、やがては独逸より帰朝せられし藤岡先生に音声学、言語の分類の事及び言語研究の事を通説に仕込まれる。」³⁹⁾との思い出話からもそれは確認できる。最も、欧米文化に触れ始めたのはそれより早かったと推測できる。それは彼の松山中学校で使った教科書からも推測できる。上記図5. の履歴書を見てみよう。「リーダー一、二、三、 イソップ物語 ロングマン四、六、 ゴルットン、フランクリン、グレートリーダーズ四、 英文典（シーモアスウィントン大小）、トムソンホール、文部省検定済英会話書 松村の植物、山県の生理、石川の動物、日本外史、満文読本、中等教科漢本、普通国語学、国文中学読本、中等国文読本、近世中地理学、新選地文学、日本史要、支那史要、西洋史、物理学教科書、化学教科書、美術教科書、スミス小代数、初等平面立体幾何学、ケージ初等三角術教科書」とあり、総覧すると、欧米系の学習書が多数を占める。その中の「松村の植物」、「山県の生理」、「石川の動物」、「近世中地理学」、「物理学教科書」、

37) 東京帝国大学（1933）『東京帝国大学卒業生氏名録』、p. 318において、「明治四十年七月卒業、文学科（言語学専修）後藤朝太郎（広島）、金田一京助（岩手）」と書いてある。

38) 三石善吉（1972）「近代日本と中国27--後藤朝太郎と井上紅海」『朝日ジャーナル』14(32)朝日新聞社、p. 41.

39) 後藤朝太郎・上野三郎（1911）『線音双引・漢和大辞典』東雲堂書店・集文館書店、p. 2343.

「化学教科書」、「美術教科書」なども欧米の学術基準に基づいて新たな学問と言えるであろう。後藤朝太郎もまたそういう時代風潮に巻き込まれているのである。

最近、日本の社会に於ける文字界の現象は、著しくデモクラシイの色彩を帯びて来て、第一に、字體が簡易になり、第二に字の大きさが経済的に小さくなり、第三に字数が著しく減退して来た。(中略)更に熟語の中に近來、新しき思想、事物を現はす語が非常に多く發生して来た。中には日本で出来た、遞信、農工、法律、經濟等の方面に現はれた熟語にして、支那内地へ逆輸入されてゐるものも頗る多くなつて来た。更に學術界方面を見ても、近時理化學の進歩、並に、工業その他農林諸學の分業的發達につれて、それぞれ専門用の特殊文字の發生を促すに至つた。それらは、舊式な漢學者流の考へからすると、或いは卑俗視されたり、或いは無學呼ばりをされて、その舊來そつくりの型に嵌らないために非難される譯であるが、然し東洋の文化は固陋漢學者の批評には何等束縛されることなく、滔々として行くべき道に向つて驀進しつつあるのである。40)

と後藤は大正時代の文字世界の状況を語っている。後藤は生涯一度も欧米へ渡ることがなかったが、時代的な雰囲気にもまれて、文字研究から出発し、新支那学を構築していくが、彼が学んできた欧米的な思考方法が無意識に彼に影響を与えたのではないであろうか。そこに彼のオリエンタリズムの濫觴があった。

6. まとめ

本論は後藤朝太郎が雑誌『庭園』に掲載した諸言説を元に、大正時代に始まっ

40) 後藤朝太郎 (1919) 『大漢和辞林』朋友堂書店、pp. 3-5.

た支那趣味ブームにおいてどのように位置づけられるのか、中国庭園への注目は後藤個人の行為なのか、それとも日本庭園協会の集団的的使命なのか、更に後藤の庭園観などについて、支那趣味の流行の時代背景、支那趣味に巻き起こされる支那庭園への興味、日本庭園協会の編集部・発起人達との関わりなどの分析と合わせ、先行研究に照らし合わせながら考察してきた。後藤朝太郎は中国文字の研究から出発し、数夥しい中国に関する著書を残したため、「支那通」として人物像が固定化されているが、実際のところ、中国庭園への視座は時代風潮のオリエンタリズムから脱却できてはいなかった。また、それは後藤個人の問題でありながら、日本庭園界が有する共通意識の表れでもあった。ここに後藤朝太郎の庭園観の特徴が見られる。更に、後藤の経歴を見なおすことにより、彼のオリエンタリズムの濫觴をも考察してみた。一連の分析を通じ、支那料理、支那服、支那劇、支那絵画などの大正時代前後のオリエンタリズムの延長線上に、庭園のオリエンタリズムも生み出されていくのである。

【参考文献】

- 上原敬二（1943）「二十五周年の回顧（一）（創立の当時）」『庭園』第25巻第1号、pp. 33.
 關倫三郎（1943）「庭園協会の幼少年時代」『庭園』第25巻2号、p. 25.
 後藤朝太郎（1919）『大漢和辞林』朋友堂書店、pp. 3-5.
 _____（1921）「支那杭州西湖の観光」『庭園』第3巻第7号、p. 9.
 _____（1924）「雲仙の将来」『庭園』第6巻第8号、pp. 8-9.
 _____（1924）『支那趣味の話』大阪屋号書店、p. 278
 _____（1924）「支那名園視察の悠邇」『庭園』第5巻第8号、p. 4.
 _____（1926）「支那名流の庭園観」『庭園』第8巻第1号、pp. 17-18.
 _____（1926）「東洋一の民族公園たるべき四川三峡の大自然美」『庭園』第8巻第12号、

- p. 16.
- _____ (1939) 「廬山を語る (一)」『庭園』第21巻第4号、p. 33.
- _____ (1943) 「二十五周年の回顧 (二) (雑誌庭園の神代の巻)」『庭園』第25巻第2号、pp. 23.
- 後藤朝太郎・上野三郎 (1911) 『線音双引・漢和大辞典』東雲堂書店・集文館書店、p. 2343
- 佐藤功一 (1922) 「私の支那趣味観」『中央公論』1月号 (新春号)、pp. 193-204.
- 龍居松之助 (1943) 「二十五周年の回顧 (一) (二十五年の昔を偲ぶ)」『庭園』第25巻第1号、pp. 34.
- 中央公論社 (1922) 『中央公論』の1月号
- 東京帝国大学 (1933) 『東京帝国大学卒業生氏名録』p. 318において、「明治四十年七月卒業、文学科 (言語学専修) 後藤朝太郎 (広島)、金田一京助 (岩手)」と書いてある。
- 西尾朗 (1972) 「英国における中国の映像-3-Sir William Chambersと彼の英華式庭園」『関西学院大学社会学部紀要』(25)、pp. 25.
- 西原大輔 (2003) 『谷崎潤一郎とオリエンタリズム—大正日本の中国幻想』中公叢書、pp. 139-140.
- 日本交通公社 (1982) 『日本交通公社七十年史』日本交通公社社史編纂室、p. 33.
- 三石善吉 (1972) 「近代日本と中国27—後藤朝太郎と井上紅海」『朝日ジャーナル』14(32)朝日新聞社、p. 41.
- 劉建輝 (2000) 『魔都上海—日本知識人の「近代」体験』講談社、pp. 181-189.
- エドワード・W・サイード著・今沢紀子訳 (1993) 「訳者あとがき」『オリエンタリズム (上)』平凡社、p. 17、pp. 393-394.

논문 투고 일자 : 2018. 12. 29.
논문 심사 일자 : 2019. 01. 31
계재 확정 일자 : 2019. 02. 01

＜要旨＞

後藤朝太郎の庭園観
—オリエンタリズムの射程—

周 堂波

大正末期に入ると、「支那趣味」という新しい概念が登場し、一時ブームとなった。後藤朝太郎はその概念の発起人の一人である。

本稿は、こうした支那趣味ブームに誘発された中国庭園は、どのように位置づけられるのであろうかという点を中心に考察したものである。この点は先行研究においてほとんど触れられておらず、また、後藤は近代日本造園史においてもその位置づけがなされていない。日本造園界における専門的組織である庭園協会はこの大正末期（1918年）に創設され、それ以降、1944年まで近代日本造園の発展を見守っていくこととなる。本論ではこの庭園協会との関連から、後藤朝太郎を読み解き、さらに後藤の庭園観の特徴を明確にしていくことを試みたものである。

Goto Asataro's View on the Garden
— The Range of Orientalism—

Zhou, Tangbo

When entering the late Taisho era, a new concept called the Chinese hobby appeared, which became temporarily popular, and Goto was one of the founders of this concept. In this study, we will examine how the Chinese garden induced by the Chinese hobby boom was positioned, a discussion rarely mentioned in previous research. Despite being a founder of this concept, Goto does not feature in modern Japanese landscaping history. The garden association, a professional organization in the Japanese landscaping world, was founded in the late Taisho era (1918), and since then it has chronicled the development of modern Japanese landscaping until 1944. In this paper, we will analyze Goto Asataro and his relation to this garden association. Furthermore, we will clarify Goto's understanding of the characteristics of the garden.